大阪は‘まち’がほんまにおもしろい

大阪あそ歩 OSAKA ASOBO®

昭和レトロ文化の薫陶を阿倍野に訪ねて

～庚申（こうしん）街道から南大阪教会、寺西家長屋まで～

戦前の大阪庶民の生活を支えた長屋。高度経済成長の影響で一戸建て住宅やマンションが増加していますが、昭和町界隈は、戦災に遭わなかった幸運もあって、現在でも多種多様な長屋が数多く見られます。懐かしい昭和レトロの面影が色濃く残る、昭和町界隈を歩いてみましょう。

①シャープ株式会社本社

大正元年（1912）、早川徳次（当時19歳）が徳尾錠（バンドのバックル）の発明で特許をとり、東京で創業（資本金50円、社員3人）。大正4年（1915）、金属繰り出し鉛筆（シャープペンシル）を発明。一世を風靡（金張り7円、銀製3円、ニッケル製1円）して、これが社名の由来となりました。しかし大正12年（1923）、関東大震災により工場を焼失して大阪に移転。その後、大正14年（1925）に国産ラジオ第1号、昭和28年（1953）に国産第1号テレビ（白黒14インチ17万5千円）、昭和39年（1964）に世界初の電卓を開発、平成11年（1999）には世界初の20型大画面の液晶テレビの販売を開始するなど、総合家電メーカーとして世界有数の大企業となりました。平成12年(2000)から平成18年（2006）まで太陽電池・太陽光発電のモジュール生産量は世界一です。

②ゆずり葉の道

昭和55年（1980）に、長池町に日本初の「ゆずり葉の道」が設置されました。「ゆずり葉の道」とは歩行者の安全と車の共存を目指した道路で、既設道路にカラーブロックや植栽を施して車道をジグザグ状にして、自動車の速度を抑制して、美しい歩道に整備したものです。

③猿山地蔵尊

かつてはこの辺りは「大字猿山」といい、もと北田辺村と寺岡村とのあいだで、荒れ果てた沼地でした。それを寛文3年（1663）、地主の奥田市郎兵衛が新田に開墾。幕府の検地を受けて「猿山新田」と称するようになりました。その後、大正14年の市域編入で、田辺町大字猿山から西田辺町と改めました。この地蔵堂だけが、当時の「猿山」の名を継承して、名を残しています。ちなみに、明治初期の現阿倍野区の地には阿倍野村（約65戸）、猿山新田（約28戸）などに農家が見られるだけで、他は一望千里の田畑で、狐狸、野鶏が棲息するような農村地域でした。農家では米麦のほかに蕪、大根、菜種、胡瓜、茄子、南瓜、時には綿などを栽培していたと記録されています。

④奥田邸の保存樹

猿山新田を開墾した奥田市郎兵衛の子孫の方が住まれています。邸内に大阪市指定の保存樹があります。新田の開墾時に防風と美観のために森林を造成し、「猿山の森」と呼ばれていましたが、保存樹はその森の名残です。保存樹とは「緑の文化財」ともいわれ、都市の美観維持と環境保全のために大阪市が保存を指定した樹木のことで、樹種や樹齢は問わず、幹周り1.5メートル以上、高さ15メートル以上の老樹・巨木です。奥田邸の保存樹はこの制度ができた昭和43年（1968）10月1日の最初に指定され、高さ23.5メートル、幹回り3.9メートルのクスノキです。

オプション ひと足のばすコース

阿倍寺跡推定地

阿倍氏の氏寺と考えられています。阿倍一族には藤原鎌足らと大化改新を推進した左大臣・阿倍倉梯麻呂（あべのくらはしまろ）がいます。当時の塔心礎から、相当規模の堂塔伽藍が存在していたと思われ、かつてこの付近から、白鳳、奈良時代の重弧文軒鬼瓦が出土しています。また、1999年の発掘調査で大溝が見つかり、その中から出土された瓦・土器から阿倍寺は飛鳥時代、7世紀の後半から16世紀前半、室町時代まで続いていたことがわかりました。この溝は寺域を囲む堀だと考えられています。現在の地名、阿倍野の由来についても阿倍氏によるという説があります。

⑤庚申街道

庚申信仰の発祥地・四天王寺庚申堂への参詣道です。一般的には四天王寺南大門前から平野区長吉田辺一丁目に至るルートですが、四天王寺南大門からJR天王寺駅東の線路上にかかっている通称「黒橋」から南下して、近鉄あべの橋駅東口を通り、阿倍野消防署前西側の道路を南下しJR阪和線長居駅に達する道路のことも、地元の方は庚申街道と呼ぶことがあります。

⑥育徳コミュニティーセンター

コミュニティーセンター内にある「リハビリギャラリーいくとく」は障害者の方々が精魂をこめて製作した美術工芸品を常時展示する施設で昭和51年（1976）に全国で初めて設立されました。

⑦阿倍野（阪南町界隈）の長屋

戦前の大阪庶民の生活を支えた長屋には、伝統的な住宅様式から和洋折衷あるいは大胆な洋風のものまで様々な創意工夫が見られます。阪南町界隈は大正13年（1924）に設立された「阪南土地区画整理組合」によって順次、町並整備が行われ、その際に様々な長屋が建てられました。

⑧寺西家阿倍野長屋（国の登録有形文化財）

昭和7年（1932）に建築された寺西家長屋は、平成15年（2003）12月1日に長屋として全国初の国の登録有形文化財として登録されました。この長屋は、都市ガスによるガス風呂が設置されるなど近代化の先駆けといえます。

⑨寺西家住宅と土蔵（国の登録有形文化財）

住宅は大正15年（1926）、土蔵は昭和10年（1935）の建築です。平成17年（2005）国の登録有形文化財として登録されました。大阪市内でも最初の土地区画整理地域に建てられた住宅で、玄関横に洋館のある和風建築です。土蔵もあり、戦前の大阪の都市景観美を伝える好例です。庭も燈籠をはじめ、川の流れが演出され、充実しています。

⑩阪田寛夫詩碑

阪田寛夫（1925～2005）は日本の詩人、小説家、児童文学作家です。大阪市住吉区天王寺町（現・阿倍野区松崎町）生まれで、熱心なキリスト教徒の家庭に育ち、南大阪教会に通いました。その後、帝塚山学院小学校、大阪府立住吉中学校、東京帝国大学文学部に入学。卒業後、朝日放送に入社し、ラジオ番組プロデューサーとして活躍しますが退社。『音楽入門』で小説家としてデビューして1974年に小説『土の器』で芥川賞を受賞。その後も評伝『わが小林一三－清く正しく美しく』で毎日出版文化賞、小説『海道東征』で川端康成文学賞などを受賞しました。童謡「サッちゃん」「おなかのへるうた」「ともだち讃歌（リパブリック讃歌）」「誰かが口笛ふいた（フランスの行進曲 Le Regiment de Sambre et Meuse）」などの作詞者としても知られています。「サッちゃん」は昭和34年（1959）に書かれた童謡で、阪田寛夫が園児だった時に、1年上のクラスに「さちこ」という園児がいましたが、この「さちこ」さんに対する親しい思いを、後にこどもの詩という形に結晶させたものです。

⑪南大阪教会

昭和3年（1928）に大阪基督教会創立50周年記念事業の1つとして企画され、設計監督を担ったのが若き建築家の村野藤吾で、これが処女作です。村野藤吾（1891～1984）は九州・唐津市生まれで、大正7年(1918)に早稲田大学建築学科を卒業。その後、大阪の渡辺節建築事務所（代表作・綿業会館）に入って、活動の主な拠点は大阪でした。代表作としてはかつての心斎橋のそごう百貨店や大阪新歌舞伎座、意外な作品としては梅田曽根崎警察署前の換気塔などがあります。旧会堂と教会塔は無事に戦火をくぐり抜けましたが、時間の経過とともに傷みが激しくなり、旧会堂を取り壊すことになりました。そのさいに藤吾は「私の長男」と呼んで強い愛着を示したというエピソードがあります。また昭和56年（1981）に新会堂が建築されましたが、それも藤吾の手によるもので、当時、藤吾は90歳。これが宗教建築最後の作品となりました。つまり、南大阪教会は、村野藤吾の処女作（教会塔）と最晩年の作品（新会堂）とが一望できる貴重な建築物ということになります。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。